Seamus Heaney のボグ・ポエム
――「民族の創造されていない意識」を掘りおこす

金　津　和　美

1．はじめに――詩的聖地としての沼地

自然を市民社会から解放された自由な野生としてとらえ、ディズマル・スワンプ（Dismal Swamp）という沼地を詩的聖地として求めた Henry David Thoreau (1817-1862) の自然観は、1862 年に出版された遺作 *Walking* において最も明確に表わされている。“When I would recreate myself, I seek the darkest wood, the thickest and most interminable, and, to the citizen, most dismal swamp” (*Excursions* 205) と語る Thoreau は、沼地を “a sacred place” (*Excursions* 205) と呼び、そこに “the strength—the marrow of Nature” (*Excursions* 205) を見いだしている。ここで Thoreau がいう沼地に宿る自然の力とは、原生林に覆われた豊かな土壌であり、いわばその腐植土のことである。“A township where one primitive forest waves above, while another primitive forest rots below—such a town is fitted to raise not only corn and potatoes, but poets and philosophers for the coming ages”(*Excursions* 206) と言うように、沼地に堆積する腐植土は豊かな堆肥となって土地を肥やし、人の心身を養う。Thoreau が巡礼者の如く歩みを向け、聖地とあがめた沼地とは、このようにあらゆる生命を育て、来るべき時代の詩人や哲学者といった精神を養う、生命力あるいは創造性の源泉であった。

同じく、降り積もる木の葉が堆積して腐食土となり、そこに言葉が生まれる詩的聖地を認める場所のイメージは、Seamus Heaney (1939-2013) による

沼地 (bog) [1] を主題とした一連の詩ボグ・ポエム (Bog Poems) の中にも見いだすことができる。Heaney において Thoreau への直接の言及は見られないが、沼地を詩的聖地として讃えたという点においてこの二人の文人・詩人は同じ詩的精神によって結ばれているように思われる。Heaney は 1969 年に出版された詩集 *Door into the Dark* に掲載された "Bogland" をはじめとして、続く二作の詩集 *Wintering Out* (1972) と *North* (1975) において数々の沼地を主題とした詩を発表している。"[poems] come sometimes like bodies come out of a bog, almost complete, seeming to have been laid down a long time ago, surfacing with a touch of mystery"[2] と、自伝的エッセイの一つである "Belfast" において述べているように、Heaney にとって沼地は伝記的に関わりの深い場所であるとともに、詩的創造性と関わる象徴的な場所であった。

本論は、Heaney のボグ・ポエムを中心として、沼地に詩的創造の場を見いだした文人 Thoreau の思想との共振性に注目する。両者の作品に共通して表れる沼地のイメージ、特に木々の枝や葉が堆積し、腐植土となった沼地の底から言葉（言の葉）が芽吹き、生まれるという詩的イメージを分析することで、イギリス・ロマン主義の自然思想を超えて美的に革新性を持つ対象として沼地がいかに描かれ、抵抗と解放の詩学が醸成されていったのか、また、その詩学が地理的・時間的隔たりを超えて Thoreau から Heaney へといかに受け継がれていったのかを考察する [3]。

2．Thoreau の "Spring"――植物成長の法則

イギリス・ロマン主義を代表する詩人 Samuel Taylor Coleridge (1772-1834) の詩想から Thoreau は多くを継承しているが、しかし、その影響関係は複雑なものであった。"Natural History of Massachusetts" を執筆した前年 1841 年 に Thoreau は、Coleridge の *Aids to Reflection*、*The Stateman's*

Manual、*Confessions of an Inquiring Spirit* といった著作を読み (Sattelmeyer, *Thoreau's Reading* 30)、特に *Aids to Reflection* を高く評価して、その一節を *Journal* の中に抜粋して書き留めている (*Journal* 222-23)。Sattelmeyer によれば、Thoreau の自然史観は、晩年に衝撃を受けることになる Charles Darwin の進化論とは異なり、むしろ Coleridge や Johann Wolfgang von Goethe などのドイツ自然哲学との関わりが深いものであるという (Sattelmeyer, *Thoreau's Reading* 80-81)。

Thoreau と Coleridge との影響関係は、両者の作品に共通して表れる霜と植物のアナロジーの中にも読み取ることができる。例えば、"Natural History of Massachusetts" において Thoreau は "vegetation is but a kind of crystallization, every one may observe how, upon the edge of the melting frost on the window, the needle-shaped particles are bundled together so as to resemble fields waving with grain, or shocks rising here and there from the stubble" (*Excursions* 25) と述べ、窓の表面についた霜の形状から植物が成長する様子を連想し、あらゆる多様な生物の繁殖や生長が基づく "crystallization" という生命原理について語っている。"crystallization" という生命原理へと通じる霜と植物のアナロジーについては、Coleridge も同様に自身の著作において頻繁に言及している。その最も初期の例として、1814 年に *Felix Farley's Bristol Journal* 誌に掲載された "The Principles of General Criticism" では、Coleridge は多様性の統一という一般的な美の定義の一例として、"The frost on a window pane has by accident chrystallized into a striking resemblance of a tree or a sea-weed. With what pleasure we trace the parts, and their relations to each other, and to the whole! Here is the stalk or trunk, and here the branches or sprays—sometimes even the buds or flowers" (371-72) と、霜と樹木や海藻といった植物との類比性を指摘している。しかし、両者の霜の描写を比較すると、Thoreau が Coleridge の自然哲学をそのまま受容していたわけではないことがよくわかる。

Coleridge の場合、被造物の類似性が認められても、それは階層の頂点に立つ人間の精神の優越性を演繹するために重要であったのであり、それゆえに霜と植物のアナロジーは、人間を動物、あるいは人間の理性をその身体的知覚から厳密に切り離すために用いられたものだと考えられる。一方、知覚を遠ざけようとした Coleridge とは対照的に、Thoreau は “Natural History of Massachusetts” において知の原点を精神的・知性的なものではなく、身体的な知覚による “direct intercourse and sympathy” (*Excursions* 28) に据えようとしたと考えられる。

本論では、Coleridge からの影響が伺える霜と植物のアナロジーが、Thoreau の *Walden* における腐植土のイメージとして展開されていることに注目したい。*Walden* 十七章 にあたる “Spring” では、鉄道線路沿いの切り通しの斜面を春になって溶け出した土砂が流れ落ち、形作る様々な模様が描写される。“Natural History of Massachusetts” における霜と植物のアナロジーには、冬の窓ガラスにできた霜の結晶化の過程と植物の生長過程が類比されていた。同じく “Spring” においても Thoreau は、春になって地中で溶けた霜が土手に作り出した葉飾り模様のなかに、土水の “the law of currents” (*Walden* 305) と植物生長の法則 (“that of vegetation” : *Walden* 305) との類比性を見いだしている。

流れ出した土砂は瑞々しい木の葉や蔓、ドロドロした小さな枝葉の堆積物、地衣植物のような葉状体といった植物の形を思い起こさせるだけでなく、“of coral, of leopard’s paws or birds’ feet, of brains or lungs or bowels” (*Walden* 305) という動物の肢体、内臓との連想を呼び起こす。さらにまた、この一節において注目すべきと思われるのは、この土手の斜面に現れる砂の様々な模様と植物・動物との連想が、その形状の類似性からのみ生まれるものではないという点である。

> Innumerable little streams overlap and interlace one with another, exhibiting a sort of hybrid product, which obeys half way the law of

> currents, and half way that of vegetation. As it flows it takes the forms of sappy leaves or vines, making heaps of pulpy sprays a foot or more in depth, and resembling, as you look down on them, the laciniated, lobed, and imbricated thalluses of some lichens; or you are reminded of coral, of leopard's paws or birds' feet, of brains or lungs or bowels, and excrements of all kinds.(*Walden* 305：下線筆者)

それぞれの事物を表現するために与えられた語、言葉において 1 音（流音)、p/b (破裂音)、f/v(摩擦音) が繰り返され、それぞれ溶け出す土砂のながれの法則と春の訪れとともに胎動し、芽吹く動植物の生長の法則を表す韻律となって響きあっていることを Thoreau は発見する。

自然の中に捉えられる流音や破裂音、摩擦音からなるこの詩的表現から、Thoreau は 同様に流音と摩擦音からなる “leaf” あるいは “leaves” という「葉」を意味する語が持つ象徴性に目を向ける。「葉」というイメージの象徴性は、植物のみならず、動物の内臓、そして大地や地球全体を一枚の葉としてとらえ、同じ一つの法則に従って生長・活動する生命統一体とみなす Thoreau の自然観と結びついている。つまり、Thoreau は自然の被造物の形状における類似性に止まらず、語の音韻的類似性に注目し、動物の内臓を示す “lobe” という語、大地を示す “globe” 、そして木の葉を表す “leaf” “leaves” という語、いずれもが lb という語根を共有していることを指摘する。

> *Internally*, whether in the globe or animal body, it is a moist thick *lobe*, a word especially applicable to the liver and lungs and the *leaves* of fat (*λειβω*, *labor*, *lapsus*, to flow or slip downward, a lapsing; *λοβο*s, *globus*, lobe, globe; also lap, flap, and many other words); *externally* a dry thin *leaf*, even as the *f* and *v* are a pressed and dried *b*. The radicals of *lobe* are *lb*, the soft mass of the *b* (single

lobed, or B, double lobed), with the liquid *l* behind it pressing it forward. In globe, *glb*, the guttural *g* adds to the meaning the capacity of the throat. (*Walden* 306-307)

“lobe” “globe” “leaf / leaves” という語が持つ音の呼応性・連続性において、Thoreau は砂そのもののなかに植物の葉の出現を予感し、大地が葉のなかに自己を表現するのを見て、霜と植物のアナロジーに見られる生命の結晶化と同様の過程、胎動する地球の生長法則と生命の統一性を確信する。そして土手の斜面に現れた砂の葉飾りに自然法則の原型を見て取った Thoreau は、“the laboratory of the Artist who made the world and me” (*Walden* 306) として大地を讃え、その創造活動に立ち会えたことに感動するとともに、自身もまた自らの詩的想像力を通じて、自然の創造行為に関わるべき存在であることを願うのである。

３．北アイルランド紛争とアメリカ――Heaney のボグ・ポエム

Heaney の詩作品においても沼地は重要な象徴性をもつ。しかし、その沼地表象を理解するためには、北アイルランド紛争さなかを生きるカトリック・アイリッシュの詩人として、Heaney の複雑な民族意識、歴史観、世界観がそこに込められていることに注意をしておかなければならない。

1974 年 10 月の王立文学協会にて行われた講演 “Feeling into Words” において、Heaney は一連のボグ・ポエムを形成する最初の作品 “Bogland” の執筆経緯について語っている。辺境（フロンティア）と西部がアメリカ人の意識にとって重要な神話であるとベルファストのクィーンズ大学で講じたことから、アメリカのそれに相当するアイルランドの神話がボグであると発見し、その翌朝、急いで書き上げたのが、この作品 “Bogland” であった (*Preoccupation* 55)。 “We have no prairies / To slice a big sun at evening—”[4] とアメリカの

大草原とアイルランドの沼地の風景の違いを語ることから始められるこの詩は、その沼地を成す地層を掘り起こし、地中深くその淵源を穿って “The bogholes might be Atlantic seepage / The wet centre is bottomless”(27-28) と、底なしの沼から大西洋の大海原へと向かう方向性をめざして結ばれる。では、なぜ Heaney がこの詩においてアメリカに思いを馳せ、大西洋へと通じることを求めたのか。Heaney の作品におけるトランスアトランティックな接点を知るためには、“Bogland” が収められた詩集 *Door into the Dark* が出版された 1969 年という年を考える必要がある。

1969 年 1 月、北アイルランド公民権協会のデモ隊に攻撃が加えられたことに端を発して、デリーのボグサイド地域でカトリックと警官隊の戦闘が始まった。同年 8 月には、デリーの事件がベルファストに飛び火して、プロテスタントの警察と暴徒がカトリック地区を襲う。事態の鎮静化を目的として英国軍部隊が派遣されたが、しかし、これをきっかけとして北アイルランドの秩序が崩壊し、北アイルランド紛争が勃発することになる。1972 年 1 月 30 日の血の日曜日事件をはじめとして、暴力はさらに拡大し、その後、30 年間にわたって英国軍兵士 763 人を含む 3000 人以上が暗殺・虐殺された。

本論において興味深いと思われるのは、北アイルランド紛争が始まる火種となった北アイルランド公民権協会が、1950 ～ 60 年代に広まったアメリカ公民権運動の影響を受けて、1967 年にカトリックへの差別撤廃を求めて発足されたという事実である。アメリカ公民権運動を指導した Martin Luther King Jr. は、著書 *Stride Toward Freedom* (1958) において Thoreau の “Civil Disobedience” に言及し、自身の非暴力抵抗運動の出発点に Thoreau を据えたとされる（伊藤 225)。同様に悪しき制度への不服従を示し、自由と平等の権利の実現を求める抵抗運動の精神は、北アイルランドで差別に苦しんでいたカトリック系住民の共感を得て、独自の公民権運動へと発展していく。しかしながら、北アイルランドでの公民権運動は、当初に理想とされた非暴力の理念とは掛け離れ、数々の武力衝突、繰り返される暗殺や虐殺とい

う、暴力の連鎖を招くことになってしまった。アメリカでの理想と北アイルランドの現実、その大きな隔たりに途方にくれ、苦悩する Heaney の思いは、“Christmas 1971” と題されたエッセイに綴られている。混乱と緊張が続くベルファストの日常を描いたこのエッセイで Heaney は、ある日曜日の賛美歌礼拝でキング牧師の有名な演説の一節を読んだときのことを回想している。“I Have a Dream” とうたう、その希望あふれる自由のヴィジョンを共有する礼拝者たちとは対照的に、Heaney の脳裏にはある悪夢が蘇る。

> I remembered a dream that I'd had last year in California. I was shaving at the mirror of the bathroom when I glimpsed in the mirror a wounded man falling towards me with his bloodied hands lifted to tear at me or to implore. (*Preoccupation* 33)

自由の名のもとに生まれる暴力、裏切られ続ける希望、一瞬にして戦いの狂気へと転じる日常、そのさなかで精神の儚い均衡を保ちながら、詩人は怨恨とも、悲しみとも、恐怖ともつかないやり場のない思いを乗り越えて、出口へと通じる言葉を探す。Heaney のボグ・ポエム最初の作品 “Bogland” は、詩集 *Door into the Dark* の巻末に収められているが、それはまさに闇の入り口に立った詩人が、語るべき言葉を求めて、故郷北アイルランドの沼地の底を覗き、その沼底に見えぬ光を見いだそうと試みる、祈りの詩であるといえよう。

エッセイ “Feeling into Words” において Heaney は、1969 年の出来事について “From that moment the problems of poetry moved from being simply a matter of achieving the satisfactory verbal icon to being a search for images and symbols adequate to our predicament” (*Preoccupation* 56) と、詩作における問題意識が大きく変化する転機となったと述べている。イギリスとアイルランドといった国家意識をめぐる武力行使への悲しみを表明する

のでもなく、また抵抗運動を賞揚し、非道な行為に憤怒するのでもなく、今、現実に起きていることを正しく見つめ、とらえることのできる言語空間を創造すること。救う道の見えない故国の窮状に直面して、詩人として Heaney はその痛ましい現実に立ち向かうため、新たな象徴を模索した。そして、William Shakespeare による「美はこの猛威にどうやって太刀打ちするか (“How with this rage shall beauty hold at plea?”)」という問いに言及し、William Butler Yeats の「逆境のしかるべき象徴 (“befitting emblems of adversity”)」という言葉によってその問いに答えている (*Preoccupation* 57)[5]。

4．逆境のしかるべき象徴

猛威に太刀打ちする美、逆境のしかるべき象徴を、Heaney は奇しくも 1969 年に英訳出版された P. V. Glob の著書 *The Bog People* において発見したと、エッセイ “Feeling into Words” において語っている。この著書は、ユットランド半島の鉄器時代初期以来の泥炭層から発掘された男女の遺体についての研究書であり、その中でも Heaney はオーフース近郊のシルケボー博物館に頭部が保管されているトールン人の遺体に強く心を惹き付けられた。Glob によればその遺体は、毎冬、地母神への供儀として捧げられた生贄であったという (*Preoccupation* 57-58)。Heaney は、この古代の宗教的供儀にカスリーン・ニ・フーリハンを神として崇拝しつつ、正義のために命を賭けるアイルランドの政治的殉教を始めとして、アイルランドの現在・過去にわたる長期的な政治・宗教闘争に見る残虐非道に通じるもの、いわばその原型的パターンを見いだしたという。そして、“Bogland” とともにエッセイ “Feeling into Words” で引用される “The Tollund Man” を始めとして、“Bog Queen”、“The Grauballe Man”、“Punishment”、“Strange Fruit” など多数のボグ・ピープルを主題とした作品を書いた。

ボグ・ピープルの象徴は、泥炭層の沼地から掘り起こされた遺体に残る暴

力の傷跡、そしてその褐色の肌の色において、北アイルランド紛争の悲劇に苦しむアイルランド人たちの歴史だけでなく、アメリカ公民権運動を通して差別からの解放を求める黒人たちの受難の歴史ともつながる。この点において Heaney の沼地と Thoreau の沼地、両者の沼地の詩学の接点を見いだすことも可能であろう。Thoreau が詩的聖地として讃えた沼地、ディズマル・スワンプはしばしば逃亡奴隷が身を沈めて隠れた場所で、奴隷問題との関わりの深い場所でもあった。奴隷制廃止以後も続く解放奴隷たちの労苦に共感して多くの逃亡奴隷に救いの手を差し出し、万人の平等を求めてコンコード・アボリショニストの集会を指導して奴隷解放運動に尽力した Thoreau にとって、*Walden* もまた真の独立、真の解放を果たすための試みであったという (伊藤 116-117)。そして、*Walden* には、黒人と同じく市民社会から抑圧され、疎外された人々としてアイルランド移民たちが描かれていることを考えると、沼地の詩学の原点において Thoreau と Heaney は同じ歴史的問題意識を共有していると言っても過言ではない。

では具体的に、Heaney と Thoreau の沼地表象はどのような点で呼応しているのか。Heaney のボグ・ポエムの中から “Bogland” と “The Tollund Man” に注目し、Thoreau の “Spring” の一節と比較しながら考察してみたい。

“Bogland” において詩人 Heaney は、アメリカの大平原とは対立するものとして、アイルランドの大地に湛えられた沼地に目を向ける。その沼底からはアイルランドの固有種オオツノジカの骨が発掘され、百年以上も泥炭層に保存されていたバターが掘り起こされるなど、沼地はアイルランドの過去の自然、生活に繋がる場所である。しかし、すでにこの沼地で泥炭を掘る者はなく、“Only the waterlogged trunks / Of great firs, soft as pulp” (20-21) と柔かくなった水浸しの木の幹が見つけられるだけである。降り積もる木々の枝や木の葉が紙のように柔らかく腐食し、堆積する沼地のイメージ。ここに用いられる “pulp” という言葉は、Thoreau の “Spring” にも見つけられる。土手の斜面に現れた砂の葉飾りを “heaps of pulpy sprays” (*Walden* 305) と呼

び、また地球を一枚の葉と捉え、そこに植物生長の法則を見いだす Thoreau は、“The whole tree itself is but one leaf, and rivers are still vaster leaves whose pulp is intervening earth, and towns and cities are the ova of insects in their axils” (*Walden* 307) として、その「葉肉 (“pulp”)」が広がり、地球全体を包む様子を想像している。

どろどろとした葉状の堆積物である “pulp” のイメージは、Heaney の初期の代表作 “Digging” の中にも共通するものがある。トーナーの沼地で泥炭土を切り取る祖父のもとに、少年 Heaney は “milk in a bottle / Corked sloppily with paper”[6] を届ける。祖父はその栓を投げ捨てて一息に牛乳を飲み干すと、再び労働へと赴いていく。その姿の逞しさ、大きさを讃えながらも、詩人は “I’ve no spade to follow men like them”(28) と祖父とは異なる場所を掘るべき使命にあることを確信する。詩人が掘るのはジャガイモを植えるための泥炭ではなく、紙で栓をした牛乳瓶から連想されるような紙の上の世界である。一見、弱々しく頼りなくさえ見えるこの紙の上の世界は、詩人にとって言葉の沼地だ。詩人はそこに “The cold smell of potato mould, the squelch and slap / Of soggy peat, the curt cuts of an edge / Through living roots awaken in my head”(25-27) と沼地に触れる感覚を甦らせながら、人差し指と親指の間にある “The squat pen” (30) でその沼底を掘ろうする。

沼地を掘るというイメージは、“Bogland” においても詩的創造性の象徴的行為として描かれている。もはや泥炭が掘れるわけでもなく、水浸しの樅の木の幹しか堆積していない貧しい沼地の底を、「この国の開拓者たちは / 内へ、下へと掘り続ける (“Our pioneers keep striking / Inwards and downwards”: 23-24)」。詩人もその一人として、アイルランド人にとっての生活の糧というよりは、むしろ精神的糧を求めて、想像力の源であるこの底なしの沼を掘る。その営みを通して、詩人は国境を越えて大西洋という広く、より普遍的で自由な世界へと解放される道を探ろうとする。

また、Thoreau は “Spring” において、雪解けの土砂が作った葉飾りを見

て “I were nearer to the vitals of the globe” (*Walden* 306) と感動し、大地・地球を肉体ととらえ、動物及び人間との一体性を認めたが、大地・地球を身体としてとらえる Thoreau の詩的想像力、それと共通する詩想が Heaney のボグ・ポエムの中にも見つけられる。 “Some day I will go to Aarhus”[7] と聖地ボグへの巡礼を誓う詩 “The Tollund Man” では、地母神の花婿として男の身体は沼地の中に捧げられ生贄とされる。地母神の女神は「沼を開いて (“opened her fen”: 14) 」生贄となった男を受け入れ、その身体を聖者の遺体のように抱きかかえ、「黒い体液 (“Those dark juice”: 15) 」で包んでいく。大地そのものが一つの身体となって男の肉体を抱き、土へと返す。大地と肉体、両者が境界なく一体となる愛の営みがここでは描かれている。

地母神に抱擁され、大地と一体となる男の身体は、この詩作品において一つの種のイメージを纏って描かれている。“His last gruel of winter seeds / Caked in his stomach” (7-8) と男の胃の中に残った種は、やがて男の身体そのものを覆う一つの種と化し、そのイメージを前にして詩人 Heaney は、生贄の供儀に応えた地母神が大地を肥やし、春をもたらすとともに、男の身体が新たな生命を得て、芽吹く時が来ることを祈る。

I could risk blasphemy,
Consecrate the cauldron bog
Our holy ground and pray
Him to make germinate

The scattered, ambushed
Flesh of labourers,
Stockinged corpses
Laid out in the farmyards,

Tell-tale skin and teeth
Flecking the sleepers
Of four young brothers, trailed
For miles along the lines. (21-32)

ここで描かれる死体は、Heaney が目の当たりにしてきたプロテスタント系イギリス人によって蹂躙され、虐殺されたアイルランド人たちの姿でもある。詩人は、故郷アイルランドの長い闘争の歴史の中で、犠牲になった者たちの遺体をトールンの男の身体に重ねあわせながら、この男の肉体から新たな詩的精神が息吹をあげ、生まれることを願う。トールンの男の身体は、人間にとって必然として避けることのできない暴力の象徴である。その象徴を受け入れることで、Heaney は故国北アイルランドの政治的・宗教的闘争の犠牲となった者たちを含め、あらゆる人類の受難の運命をあがない、詩的再生の希望がもたらされることを祈っている。

そして、Heaney にとってそのような贖罪と再生の場は、言葉の詩的音楽性のなかに見いだされるものであったと言えるだろう。Thoreau が “Spring” において、“leaf / leaves”（葉）、“lobe”(内臓)、“globe”（地球）という lb という語根を共有する語の音の呼応性に注目し、植物・動物・大地が一つの生命体として共有する生長の法則を見出したように、Heaney もまた同様に、見知らぬユットランド半島の沼地と故郷北アイルランドの沼地に根付く受難と再生という生命の法則、その空間的隔たりを超えて息づく生命の力の広がりを、詩的な音風景として再現しようとしている。

生贄運搬車に乗せられていくトールンの男の「悲しい自由 (“his sad freedom”: 33)」に思いを馳せながら、詩人 Heaney はトールンの沼地へと巡礼にむかうために車を運転する自身の姿を想像する。“Tollund, Grauballe, Nebelgard” (37) と詩人が口ずさんだ名は、いずれも生贄の供儀が行われた土地の名である。しかし、彼にはその土地の言葉は理解できない。知らない

場所、訪れたことのない場所の名前は、意味を持たない音となって、空虚な言語空間を生む。この遊動する言語空間に漂い、“I will feel lost” (43) と方向性を失って途方にくれながらも、詩人はそこに救いを見いだす。具象をまとわない音の響き、その空虚さが想像的可能性の場を開き、空間的、時間的、あるいは信条的なあらゆる隔たりを超えて、人間であるがゆえの悲しい現実を掬い取り、浄化していく。“Out there in Jutland / In the old man-killing parishes” (41-42) という、遠く訪れたことのない、名しか知らない場所の言葉の響き、そのぬくもりのなかで、詩人は現実の恨みや憤りから解き放たれて、「悲しく、なぜかほっとしながら (“Unhappy and at home”:44)」、人間の受難の運命と向き合い、再生の祈りを捧げる場所が得られたことに救いを見いだすのだ。

5．まとめ――現代のトールンの男

ボグ・ポエムの執筆経緯を語ったエッセイ “Feeling into Words” において、Heaney は詩人の責務について述べ、“to forge a poem is one thing, to forge the uncreated conscience of the race, as Stephen Dedalus put it, is quite another” (*Preoccupation* 60) と結んでいる。北アイルランド紛争が勃発した 1969 年の直後に出版されたこのエッセイにおいて、James Joyce の自伝的小説 *A Portrait of the Artist as a Young Man* にふれていることからも、Heaney がここでいう “the uncreated conscience of the race” が、アイルランド人たちに限定されたものと考えたとしても間違いではないであろう。しかし、20 世紀末から 21 世紀にむけて、北アイルランドが新たな時代を迎えた頃に書かれた詩作品を読み、振り返ると、Heaney がいう「民族 (“the race”)」がもはやアイルランドのみを指すものではなくなっているようだ。むしろ Heaney は、あらゆる時代、あらゆる地域の民族を含んで共有される、いわば全地球的規模ともいえる、いまだ創造されたことのない意識、そ

れを語る言葉を作り出すことに 21 世紀の詩人の責務を見いだしているように思われる。

自然と文明の乖離、その仲介を担うものとしての文学 / 詩という問題意識は、Thoreau の中にも見られる。“Spring” における土手の斜面に現れた葉飾りの描写も、それが鉄道の切り通しの土手に現われた模様であったことを考えれば、ウォールデンの森は、それと境界を接する機械文明との緊張関係の中に存在していることがわかる。Thoreau は「葉 (leaf / leaves)」のイメージを通して、文明を覆って繁茂する自然の生命力を讃えることで、自然と文明とを仲介する *Walden* という文学空間を切り開いた。そして、「民族」の新しい意識の創造を沼地に求める Thoreau の決意は、遺作 *Walking* において最も強く表明されている。

同様に Heaney も、後年の二つのボグ・ポエム “Tollund”（*The Spirit Level* [1996] 所収）と “The Tollund Man in Springtime” (*District and Circle* [2006] 所収) において、自然と文明を仲介する詩の役割について問うている。1994 年 8 月に IRA 停戦合意がなされた直後に書かれた “Tollund” は、巡礼に行くことを誓った地に妻と二人で訪ねたときの様子を描いた作品である。しかし、初期の “The Tollund Man” とは異なり、この詩では政治的・宗教的暴力による受難の過去への追想よりも、その風景を浸食する現代文明、土地の土俗性の根源である過去との断絶に目が向けられている。

過去と現代との断絶、そこに感じられる違和感については、1998 年の聖金曜日協約締結後に出版された “The Tollund Man in Springtime” にも描かれている。Heaney の最初のボグ・ポエム “Bogland” では、大西洋へと通じる道は、沼底を穿った深い地中にあった。しかし、“The Tollund Man in Springtime” では、上空を行き交う飛行機によって大西洋への横断はより速く、より容易に果たすことができる。沼地から掘り起こされて地上に戻ってきた男は、交通網の発達とデジタル化によって人とモノ、情報が大量かつ高速に行き交うグローバル社会という別世界に戸惑う。しかし、その違和感、

自身を取り巻く環境との相容れなさそのものは、決して初めてのものではないと気付くのだ。地母神への生贄として沼地という異世界に身を投じられて以来、何百年も男はずっと泥土に身をあずけて、その違和感に堪えて重々しく沈黙しながら、地母神と一つとなり、その生命力の結晶と化すのを待っていた。今、また新たに 21 世紀の異世界に直面して、“Of another world, unlearnable, and so / To be lived by, whatever it was I knew / Came back to me”[8] と慣れ親しんだ別世界の感覚がよみがえってくる。グローバル規模の高度資本主義・高度情報化社会の中で、言葉は電子的で等価的な記号へと化し、空虚かつ軽薄に流通・交換されていく。“As a man would, cutting turf, / I straightened, spat on my hands, felt benefit / And spirited myself into the street” (82-84) と、現代のトールンの男は、この厚みを失ってしまった言葉の世界に身を投じ、新しい音・言葉を生み出すため、薄っぺらく無機質で生気を失った言語空間を再び言葉の沼地に変えるために掘り起こそうと試みるのだ。

沼地から切り離されたトールンの男の表象は、21 世紀のポスト・ヒューマンの時代を生きる人間の姿として解釈される。大地と切り離された 21 世紀の人類は、いかに大地と繋がる感覚を取り戻し、いかに大地を語る言葉を見いだすのか。全地球的なあらゆる「民族」にとって、いまだ創造されたことのない意識、地球という新しい場所の感覚を語る言葉を生み出すことにこそ、21 世紀の時代を生きる詩 / 文学に課せられた責務があると Heaney は考えていたように思われる。

＊　本稿は科学研究費補助金・基盤研究 (B)15H03189『トランスアトランティック・エコロジー――環境文学 / 思想の還流と変容』2016 年度第 2 回研究会（2017 年 3 月 18 日於専修大学）での口頭発表に加筆修正したものである。

注

1. 沼沢地を表す言葉として、“swamp” “bog” “fen” など複数の言葉がある。Thoreau は “swamp” という語を用い、Heaney はアイルランドに固有の呼称として “bog” という語を用いている。それぞれに地域によって地質的形状は異なっているため、厳密には同じものとは言えないが、本論では「沼地」という語を用いて総称した。
2. *Preoccupations* 34：Heaney の詩作品において、イギリス・ロマン主義を代表する詩人 William Wordsworth の影響は大きい。詩的想像力を沼地に埋もれた肉体として表現するイメージには、Wordsworth の *The Prelude* における、エスウェイト湖の溺死体のイメージ (V, 450-480) と共通するものがあるという示唆を小林英美氏より得た。
3. ボストンを始めとするアメリカの都市近代化は、Adam Smith や Thomas Reid といったスコットランド道徳哲学や David Ricard の古典経済学といった旧大陸、特にイギリスの思想を受容することによってもたらされたものであり、近代化に向けた改良を推進する思想のひとつとしてピクチャレスクという風景美にみられる美的趣味もアメリカに好んで受け入れられていた。沼地はこのような近代的美意識の範疇から除外されるべき存在と考えられていたのに対して、Thoreau は沼地において市民社会からの解放と自由を可能にする野生を見いだして賞賛した。
4. *Open Ground* p.41, 1-2: “Bogland” の引用はこの版による。
5. “How with this rage shall beauty hold at plea?” は Shakespeare の “Sonnet 65” 3 行目からの引用。“befitting emblems of adversity” は Yeats の詩 “Meditations in Time of Civil War” 第二連最終行からの引用。
6. *Open Ground* pp.3-4, 19-20: “Digging” の引用はこの版による。
7. *Open Ground* pp.62-63, 1: “The Tollund Man” の引用はこの版による。
8. *Selected Poems 1988-2013* pp.166-69, 65-67: “The Tollund Man in Springtime” の引用はこの版による。

参考文献目録

Coleridge, Samuel Taylor. *Shorter Works and Fragments I*. Edited by H. J. Jackson and J. R. de J. Jackson. *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge* , vol. 11, Princeton UP, 1995.

Heaney, Seamus. *Finders Keepers: Selected Prose 1971-2001*. Farrar, Straus and Giroux, 2002.

---. *Opened Ground: Selected Poems 1966-1996*. Farrar, Straus and Giroux, 1998.

---. *Preoccupations: Selected Prose 1966-1978*. Farrar, Straus and Giroux, 1980.

---. *Selected Poems 1988-2013*. Farrar, Straus and Giroux, 2014

Russell, Richard Rankin. *Seamus Heaney's Regions*. U of Notre Dame P, 2014.

---. *Seamus Heaney: An Introduction*. Edinburgh UP, 2016.

Sattelmeyer, Robert. *Thoreau's Reading*. Princeton UP, 1988.

Sattelmeyer, Robert and Richard A. Hocks. "Thoreau and Coleridge's *Theory of Life*." *Studies in The American Renaissance 1985*, edited by Joel Myerson, UP of Virginia, 1985, pp.269-284.

Thoreau, Henry David. *Walden*. Edited by J. Lyndon Shanley. Princeton UP, 1971.

---. *Journal*. Edited by E.H. Witherell et al., vol. I. Princeton UP, 1981.

---. *Excursions*. Edited by Joseph J. Moldenhauer. *The Writings of Henry D. Thoreau*, Princeton UP, 2007.

Walls, Laura Dassow. *Henry David Thoreau: A Life*. U Chicago P, 2017.

Wordsworth, William. *The Thirteen-book Prelude*. Edited by Mark L. Reed. Cornell UP, 1991.

伊藤詔子　『よみがえるソロー――ネイチャー・ライティングとアメリカ社会』東京：柏書房　1998 年

ヒーニー、シェイマス　『郊外線と環状線』村田辰夫・坂本完春・杉野徹・薬師川虹一 訳　国文社　2010 年

---.『シェイマス・ヒーニー全詩集 1966-1991』村田辰夫・坂本完春・杉野徹・薬師川虹一 訳　国文社　1995 年

---.『プリオキュペイションズ――散文選集 1968-1978』室井光広・佐藤亨 訳　国文社　2000 年